2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 4 月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026 年 5 月 5 日

春の穏やかな気候から初夏の気配へと移り変わる季節となりました。フィンドレーのキャンパスでも日差しが一段と明るくなり、新緑が広がっています。朝晩はまだ少し肌寒さが残るものの、日中は過ごしやすく、外で過ごす時間が心地よく感じられるようになってきました。学期末を迎え、課題や試験に追われる慌ただしさの中にも、これまでの時間を振り返る機会や、仲間との別れを実感する場面が増えてきました。本レポートでは、4 月の留学生活を学習面と生活面の両面から振り返り、その中で得た学びや経験について詳しく報告いたします。

【学習面】

4 月は、これまでの学びを実践として形にする機会が多く、単に知識を身につけるだけでなく、それをどのように応用し、他者に伝えるかという点において大きな成長を感じた時期でした。

まず、Marketing 400 の授業では、「American 250」をどのように学内で広めるかというテーマでグループワークに取り組みました。この課題では、予算が 0 ドルの場合と 500 ドルの場合という異なる条件で戦略を考える必要があり、それぞれの制約の中でどのように効果を最大化するかが重要なポイントでした。

0 ドルの場合には、SNS を活用した拡散や口コミの促進、学生同士のネットワークを利用した情報共有など、人のつながりを中心としたアプローチを考えました。実際に、どのような投稿が人の関心を引くのか、どのタイミングで情報を発信するのが効果的かなど、細かな点まで議論を重ねました。一方で、500 ドルの予算がある場合には、ポスターやフライヤーの作成、キャンパス内でのイベント開催など、視覚的・体験的に訴える方法を取り入れることが可能となりました。この違いを比較することで、同じ目的であっても条件によって最適な戦略が大きく変わることを実感しました。

また、グループワークの中で意見をまとめる難しさも感じましたが、その分、自分の考えを論理的に説明する力や、他者の意見を取り入れながら最適解を導く力を養うことができました。

Marketing 220 の授業では、これまでに学んだ経営戦略をもとに、新しいビジネスアイデアを考案しました。私たちのグループは、フィンドレー大学内に 24 時間営業のカフェを設置するという提案を行いました。夜遅くまで利用できる場所が少ないという学生の不便さに着目し、その課題を解決する形でアイデアを発展させていきました。

このカフェでは、静かに勉強できるスペースと、友人同士で会話できるスペースを分けることで、それぞれの目的に応じた利用ができるようにしました。また、ドライブスルーやテイクアウト、アプリでの注文システムを導入することで、利便性を高める工夫も取り入れました。こうした細かな設定を考えていく中で、実際に利用する人の立場に立つことの重要性を強く感じました。

Communities and Societies の授業では、「Unsung Hero」をテーマにプレゼンテーションを行い、私は Wat・Misaka さんについて発表しました。彼の功績だけでなく、その時代背景や社会的な状況を理解することが重要であると感じ、調査を進めました。この経験を通して、多様性とは単に違いを認めるだけでなく、その背景を理解することが重要であると学びました。

さらに、Choir のラストコンサートは、学習面の中でも特に心に残る経験でした。最後の一曲では、卒業するメンバーとインターナショナルの学生がソロパートを担当し、それぞれの思いを込めて歌いました。歌っている最中、これまでの練習や日々の出来事が頭に浮かび、自然と感情が込み上げてきました。曲の終盤に差しかかるにつれて、「この時間が終わってしまう」という実感が強まり、寂しさと同時に達成感も感じました。音楽を通して人とつながる経験の大きさを改めて実感しました。

【生活面】

生活面においては、一つひとつの出来事をただ経験するのではなく、「その場にいたか

らこそ感じられたこと」を意識する機会が多くありました。

まず、ナイアガラの滝を訪れた経験は、これまでの中でも特にスケールの大きさを感じた出来事でした。私はアメリカ側とカナダ側の両方から滝を見ましたが、それぞれで印象が大きく異なっていた点が非常に興味深かったです。

アメリカ側から見たときは、水の流れのすぐ近くまで行くことができ、滝の迫力を間近で体感することができました。特に、水が落ちる音の大きさや、常に上がり続ける水しぶきの量は想像以上で、視覚だけでなく音や空気の湿り気まで含めて、全身でその迫力を感じることができました。一方で、カナダ側から見ると、滝全体を広い視点で眺めることができ、いわゆる「ナイアガラらしい景色」を一望することができました。特にホースシュー滝のカーブがはっきりと見え、水の量やスケールの大きさをより客観的に感じることができました。同じ滝でも、見る場所によってここまで印象が変わるのかと驚きました。

また、「Maid of the Mist」という船に乗り、滝のすぐ近くまで行く体験もしました。乗船時にはレインコートが配られましたが、それでも全身が濡れるほどの水しぶきがかかり、想像以上に迫力のある体験でした。船が滝に近づくにつれて視界がほとんど水しぶきで覆われ、周囲の景色が見えにくくなるほどで、まさに自然の力の中に入り込んでいるような感覚でした。この体験を通して、写真や映像では伝わらないスケール感や臨場感を実際に体で感じることの重要性を実感しました。

また、Kings Island を訪れた際の体験は特に印象的でした。中でも私のお気に入りになったのは「Orion」というジェットコースターです。遠くからでも分かるほど高くそびえるコースを見たときは正直かなり怖さもありましたが、実際に乗ってみると、その印象は一気に変わりました。最初の頂上にゆっくり引き上げられる時間の静けさと、その直後に一気に落下する瞬間のギャップがとても強く印象に残っています。落ちる瞬間、視界が一気に開けて空に投げ出されるような感覚があり、それがただ怖いだけではなく「楽しい」と感じられるのが不思議でした。

また、実際に他のジェットコースターに乗る中で、前列と後列で体感がかなり違うことにも気づきました。前列では視界が開けていて「これから落ちる」というのが見える分、緊張感が強く、後列では引っ張られるように急加速する感覚がより強く残りました。こうした違いを友人と話すことは非常に楽しく、待ち時間さえも含めて一つの体験になってい

ました。さらに、乗り終えた直後に全員で「今のやばかったよね」と同じリアクションを繰り返しているのに、毎回新鮮に盛り上がれることも印象的でした。このような一見些細なやり取りこそが、後から思い返したときに強く記憶に残るのだと感じました。

次に、デトロイトで参加したデミ・ロヴァートのコンサートも非常に印象に残っています。特に印象的だったのは「Heart Attack」で、イントロが流れた瞬間に会場の空気が一気に変わり、観客の歓声の大きさが一段階上がったのを感じました。ライブでは原曲よりも力強く歌い上げられており、高音部分もブレることなく響いていたことが強く印象に残っています。また、「Skyscraper」のパフォーマンスでは、会場全体が静まり返り、観客一人ひとりが歌に集中している空気を感じました。照明が落ち、スポットライトだけが当たる中での歌唱は、音源で聴くのとは全く異なる迫力があり、その場にいるからこそ感じられる緊張感と一体感がありました。さらに、曲ごとに衣装や演出が変化し、単なる歌唱だけでなくショーとして完成されている点も印象的でした。観客がスマートフォンのライトを点ける場面では、会場全体が一つの空間としてつながっている感覚があり、言葉や国籍を超えて同じ時間を共有しているという実感を持ちました。

FUKUVI USA, INC. への企業訪問も、自分にとって特別な意味を持つ経験でした。私は福井県の奨学生としてこの留学に参加しており、フクビ化学工業株式会社は福井県に本社を持つ企業です。そのアメリカ拠点で FUKUVI USA を訪問できたことは、単なる企業見学以上の意味を持っていました。

福井県の奨学制度は、地域の人材育成や国際経験の促進を目的としており、将来的に地域や社会に貢献できる人材の育成を目指しています。そのような背景の中で、自分と同じ地域にルーツを持つ企業が海外でどのように事業を展開しているのかを実際に見ることができたことは、大きな学びとなりました。

現地では、製品や事業内容の説明だけでなく、海外で事業を行う上での課題や工夫についても話を聞くことができました。

さらに、映画『ショーシャンクの空に』のロケ地であるマンスフィールドを訪れた経験も非常に印象的でした。実際に訪れたオハイオ州立矯正施設は、想像以上に大きく、外観からすでに独特の重厚感がありました。

建物の中に入ると、長く続く廊下や高い天井、そして規則的に並ぶ独房の光景が広がっており、そのスケール感に圧倒されました。特に印象的だったのは独房の狭さで、実際に中に立ってみると、一人が生活するには非常に閉鎖的で圧迫感のある空間であることを強く実感しました。

また、アンディの独房として使われた場所では、ポスターが貼られていた壁なども再現されており、映画のシーンがそのまま現実に重なる感覚がありました。観光地でありながらも、場所自体が持つ歴史的背景や静けさが残っており、単なる観光とは異なる緊張感がありました。さらに、場所によって光の入り方や空気感が異なり、明るく開けた場所と暗く閉ざされた場所の対比が非常に印象的でした。映画の中で感じていた「希望」と「閉塞感」のコントラストが、この空間そのものに表れているように感じました。

4月後半は、多くの学生がキャンパスを離れる時期でもあり、別れの時間が増えていきました。忙しい中でも時間を作り、一人ひとりと向き合うことを意識しました。手紙を書き、折り紙のハートを添えて渡した際に涙を流してくれる友人もおり、自分が築いてきた

関係の深さを実感しました。

４月は、経験の一つひとつに対して「その場にいるからこそ感じられること」を強く意識した一か月でした。単なる出来事ではなく、それぞれの体験に意味を見出すことができた点で、非常に密度の高い時間であったと感じています。今後は、この経験を活かしながら、さらに成長していきたいと考えております。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。
itos1@findlay.edu